



重文 金溜塗具足

目 次

松平元康所用の金溜塗具足について.....	2
友の会だより.....	4
駿府城の歴史的意義.....	5
博物館のあゆみ.....	14

松平元康所用の金溜塗具足について

森 威 史

永禄3年(1560)5月12日、今川義元は上洛の意を果たそうと、まず織田領の侵攻のため、2万5千の大軍を率いて駿府を出た。その今川軍の先鋒には、いつも白地に三葉葵の紋を染めぬいた松平軍の旗がひらめいていた。それは19才の凛々しい若大将松平元康(後の徳川家康)である。

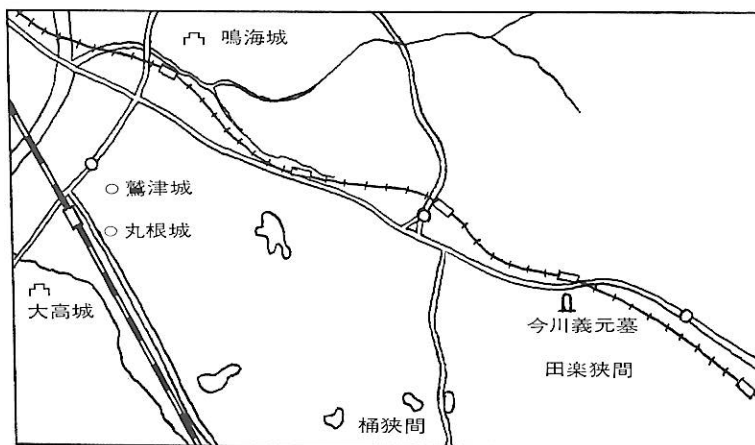
本隊が16日岡崎に入り、17日池鯉鮒に進み、18日沓掛に陣した時、今川の属城である大高城より使者が来て、兵糧が欠乏しているから補給してくれとの申し出があった。しかし、今川勢が大高城に兵糧を入れるには織田方の丸根城と鷲津城の両城を打破しなければならず、今川方にとっては、それがなかなか困難なことで、その難役にあたらうとする者がいなかった。そこで今川義元は、これを弱冠19才の松平元康に命じたのである。酒井忠次・石川数正らの重臣たちは「大高城は織田勢に囲まれた城である。それをわが軍だけで兵糧入れなどは、到底叶わぬことであるから駿府より援軍を頼まれては」と諫めたが、元康は聞き入れなかった。

大高城は尾張国知多郡の北部を流れる天白川の南岸にあり、今川義元の妹婿鶴殿長照が守備していた。またこの城の東北で天白川の北岸およそ4キロの所には鳴海城があり、岡部正信が守備していた。これらの城は、信長を攻撃する前進基地であるため、信長は大高城の東辺に鷲津と丸根の二城を置き、鳴海城の周辺には丹下・善照寺・中島の三城を置いて今川勢に備えた。

義元は熱田に進んで信長の清須城を攻めるのが作戦であり、信長は今川勢を国境外に撃攘するのが急務であった。その行動は大局において今川方が攻勢で、織田方は守勢である。やがてこの攻防戦は元康が大高城へ兵糧を入れることにより開始された。

元康は百十疋の馬に450俵の兵糧米を積んで大高城の近くまで来たが、容易に近づけそうもない。そこで軍勢を二隊に分け、酒井忠次・石川数正らに命じ、丸根・鷲津の両城をさけ、敵地深くにある寺部城を攻めさせ、その城下に火を放った。寺部城の急を救おうとして丸根・鷲津の城兵が城を出たすきに、元康の率いる一隊は大高城に兵糧を運び込んだのである。この大高城への兵糧入れは、後年家康生涯の軍功と称えられている。

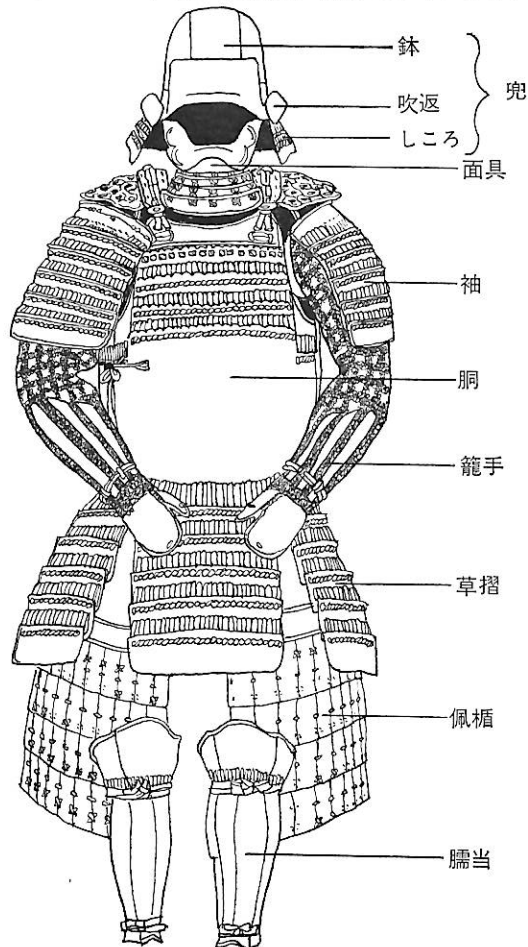
その翌19日の夜明け前、元康は石川家成・酒井忠次を先峰として丸根城を攻め落とし、時を同じくして義元の将朝比奈泰能は鷲津城を攻め落した。炎上する二城を馬上より見ながら、信長



がまっしぐらに桶狭間に向ったのはこの時である。

その頃今川義元は、桶狭間の北方田楽狭間に本陣を張り休息していたが、それを知った信長は東に迂回し、背後の太子山を越え、機をうかがっていた。空には黒雲がみなぎり、やがて雷雨がおそってきたが、それもやむかと見えた時、二千の織田軍は一丸となって義元の本陣に斬り込みをかけた。不意をつかれた今川勢は大混乱におちいり、味方を敵とまちがえて斬り合いをするありさまであった。まもなく義元を討ち、その全軍を潰走せしめた。時に午後二時頃であったという。

義元が田楽狭間で討たれた時、松平元康は大高城にいた。田楽狭間と大高城との間は、直線距離にしてわずか四キロしかないのに、元康が義元の死を知ったのは日没の頃であった。石川家成・酒井忠次らの重臣は信長の攻勢を予想して退城を勧めたが、元康は「義元の死報がまだ今川方から正式に入っていない。もし大高城を退いた後で義元の戦死が虚報であった時、二度と義元に合わせる顔がないではないか」と言って容易に動かなかった。やがて織田方に属していた伯父の水野信元が遣わした浅井六之助道忠から義元の討死を知らされ、信長が押しよせぬうちに早く退城した方が良くと忠告され、確報を得てから兵をととのえ、夜半に大高城を発し、水野信元の臣上田近正に途中まで案内してもらい、浅井道忠を随えて、翌20日に岡崎城下の大樹寺に入った。そして岡崎城中の今川勢が引揚げのを待って、23日に入城した。この岡崎城入城の際の元康の言動について、実に道義的に伝えられているが、事実はなかなか用心ぶ



かく、抜け目がない。それは丁度、賤嶽合戦の時に前田利家がとった行動とよく似ている。武田信玄が「元康は武道分別両方に達したる人也」と言って賞讃したということが伝えられているが、今川方にとっては一種の裏切り者だったのである。

ともかく、義元の死によって元康は完全に今川家から解放され、自主独立の武将となった。それは元康の生涯における一大転機であると共に、今にもくずれんばかりであった松平族党政の立直しの時期であった。前の岡崎城主松平広忠（家康の父）がなくなってから11年目で、岡崎は再び松平当主の手にもどったのである。それは単なる復古再生ではなく、新しい時の流れに順応する創造的発展であった。

元康が自主独立した永禄3年から410年という歳月をへた現在、嬉しい事に、その当時元康が着用した具足が当館に保存されている。

具足は全て金溜塗で、兜は日根野形、前立はなく、面具は半頬で三枚板札を黒糸で素懸威した垂が付いている。胴は立拳を伊予札の基石頭にみせた切付の鉄板を二枚用いて毛引威としたいわゆる仏胴胸取。籠手は五本篠籠手、袖は五枚の板札を黒糸で素懸威にしたもの、佩楯は伊予佩楯、脇当は立拳を鎖でつないだ五本筒である。

この具足を見ると、まだ熱い血潮がながれているような、今にも動きだしそうな若さと熱気があふれ出ており、いかにも若き武将元康の着用した具足であったことが判る。また、この具足は俗に大高城兵糧入れ具足と呼ばれ、大高城への兵糧入れが元康の初陣であったかのごとく解釈されているが、それはまちがいで、『元文年紀録』その他の記録を見れば明かなように、永禄元年（1558）西三河一帯を支配し、織田信長に通じていた鈴木重教の寺部城を攻め落したのが初陣である。具足が初陣の頃から使用され、大高城兵糧入れで武勲をあげたために、それらの事が混合して誤解されるようになったのであろう。

『信長公記』をみると、永禄3年5月19日の夜明けに、元康が朱武者にて先懸をし、丸根城を落したとある。きっと金色の具足が初夏の夜明けの太陽にてらされて赤くかがやいて見えたのであろう。（当館主任学芸員）

昭和46年度「友の会」行事予定

昭和46年度友の会は、下記のような行事を予定しておりますが、会員の方々のご意見もお聴かせ下さい。

- 4月例会—「戦国武将展」鑑賞（会場・田中屋）
 - 5月例会—座談会「戦国の人々」—戦国武将展を終って—
 - 6月例会—「原始人展」鑑賞（会場・田中屋）
 - 7月例会—史跡めぐり（予定地＝長篠城趾と設楽原古戦場）
 - 8月例会—文化財入門講座
 - 9月例会—座談会
 - 10月例会—特別展「徳川將軍の書画展」鑑賞
 - 11月例会—講演会 講演予定 国学院大学教授 桑田忠親氏「徳川將軍の人間像」（仮題）
 - 12月例会—第5回博物館めぐり（東京都内の博物館を訪ねる）
 - 1月例会—懇親会
 - 2月例会—古文書演習
 - 3月例会—史跡めぐり
- （予定地＝遠州二俣城趾、岡崎信康墓他）

駿府城の歴史的意義

安 本 博

(静岡市役所総務部勤務)

今、駿府城の面影をしのぶことのできるのは、濠の石塁と、わずかに残る老松しかない。無秩序に膨張していく地方都市静岡の都市計画のしわよせにあい、その姿は刻々と失われようとしている。

駿府城の歴史を振り返ってみると、そこには六百余年の時の流れがある。今川氏11代にわたる館からはじまり、徳川政権の出発点として、二元政治の一つの柱となった大御所家康の隠居所として、そして徳川幕府の直轄領治下の城から県政の中心地へと、その時代の変遷と共にうつり変ってきた。

したがって、駿府城の歴史をひもとくことは、発展する静岡の生命を見極めることであり、また、これから芽生えていく若葉の方向を見定めることである。

そこで、ここに静岡という顔の一つの目となっている駿府城を素直な態度で見直し、その歴史的意義を読者に訴えることにする。

今川氏の館 日本の城郭は複雑な地形と気候の変化の多い国土のため、その発達には幾多の制限を受けている。

駿府の地は古来から交通の要地に当り、南は海に面し、他の三方は山を負った天然の要害の地であった。さらに、東に富士川、西に大井川の障害を控えることから、その経済的・軍事的利用価値は高く評価されていた。

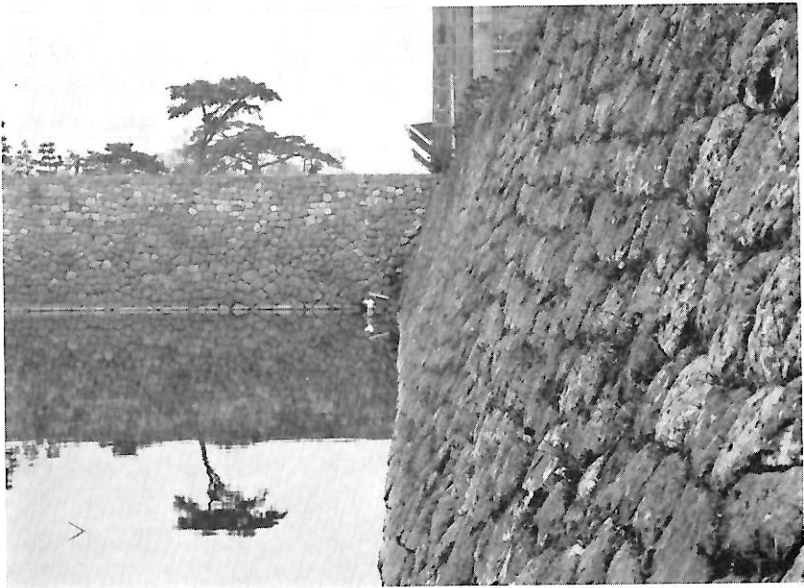
建武5年(1358)今川範国が守護となったが、八条院御領(服部庄)と旧得宗領(入江庄)の間にはさまれ、南朝方の狩野と入江の在地武士団の執拗な抵抗にあい、駿河国府に入ることができなかった。間もなく、元中9年(1392)に南北朝は合一し、今川泰範の時になってようやく駿府に入れるようになった。応永20年(1413)頃、志太郡葉梨村の花倉城に居た、泰範の子範政が駿府に移って館を造った。それは現在の静岡市立病院の付近である。古来、安倍川は賤機山脈のつくる自然の地形に左右されて、乱流しながら静岡平野の沖積地を形成した。この沖積地のうちで、最も標高のある地点が、館を立てる場所として選ばれたわけである。

『武徳編年集成』をみると「かき揚げの屋敷なり」と、その規模を記載している。“かき揚げの屋敷”とは、回りの土を掻き上げて堤と堀を築き、柵を設けてその中に屋形を構え、出入口には木戸を拵えた屋敷のことで、城というよりはむしろ防備を施した武家屋敷といった方がふさわしい。

今川氏は累代、政治・経済・文化の中心として府中に居館を置き、軍事的拠点と背後の賤機山上に設けた。しかしどう見ても、今川氏の館は、北の賤機山、東の谷津山、南の八幡山の山城から、居館の動静が見ぬかれるおそれがあるため、館をとりまく周辺の山砦を防備することに力をいれた。だが、なかなか館を改造して城塞にすることに踏みきらず、そのかわり、とくに富士川～大井川間に分布する今川家臣団の拠点を防備することを考えた。すなわち、東は富士川右岸の岩淵・白鳥・万沢山を第一線、興津の清見関を第二線とし、西は大井川左岸を第一線、島田在天津・田中・相川を結ぶ線を第二線、六合・藤枝・高草を第三線、安倍川を最後の防禦線とする布陣である。当時の今川氏の領国経営にたいするなみなみならぬ努力のあとがしのばれる。

今川十代氏親の代になると、西は高草山塊を越えて、花倉・岡部・田中・石脇・花沢の諸城

砦をつらねて交通路の宇津谷・日本坂峠を封じ、内に丸子・持舟の城砦を造成して府城の外護とし、西敵に対する守備を固め、東は外舅伊勢長氏（のちの北条早雲）が興国寺城主となって、善徳寺（いまの吉原）や蒲原の城と連絡をとり、守を堅くしたため、朝比奈泰以等によって、今川氏の館は賤機



駿府城址

山城とともに修築される機会に恵まれた。

安倍川の水を今の静岡市水道町の堰口あたりからひき、浅間神社の地点から三方に流して駿府の街の用水とした。また、社寺や府内の宿駅を整理して商業の街をつくった。

今川氏の勢力は氏親・義元の代になると急速に東西に延び、駿河・遠江・三河の諸国におよんだ。駿府の街は東海道における政治・経済・文化の中心として、西の京都を凌ぐほどになり、今川氏は駿府の経済的基礎を作るため、市場を館の外郭に開き、保護・優遇を加え、あわせて領国内の産業を勃興させた。

今川氏が守護大名としての勢力を伸長するにつれて世の中の情勢は変ってきた。すなわち群雄割拠する戦国時代を迎えたわけである。兵法の進歩と戦闘の変化に伴ない、軍事的なものを主に、経済的なものを従にして、今川氏の居館も城郭につくりかえる時期が近づいていた。館を中心に、北に賤機山城、西に丸子城・持舟城を設け、南に八幡城、東に愛宕城を造成し、それを結んだ静岡平野の中に城下町を形成することをもくろんだ。しかし、中途今川義元が桶狭間の役で戦死するという不測の事態が生じ、今川氏がたてた駿府の都市計画は挫折してしまった。

いま、臨済寺の裏山に軍事拠点として城郭構築の第一歩を印した賤機山城をみると、その規模はあまりにも小さく手狭で、用兵の便を欠いた貧弱な防禦的山砦であったことが判る。

家康の築城 元亀・天正の時代になると、織田信長・豊臣秀吉は相次いで安土や大坂にいままで類例をみない立派な城郭を築いた。それはきわめて堅固で、しかも壮麗な天守閣と矢倉を設け、濠は深く広くして象徴的な威容を誇る城であった。今川の居館が武田氏の兵燹で一瞬のうちに灰となり、荒廃と化したのと対照的だった。

『武徳編年集成』によれば「天正17年（1587）正月28日、駿府城再び経始せられる。そもそも当城は要害よろしきにあらず、高山近く、剩え卑湿の地にして、塁構堅固ならずといえども海口に近く、運送自由なるをもって、御居館となしたまう所なり」とある。駿府経営の当初、徳川家康がひさびさに駿府の風物からうけた印象は、廃墟と変わり果てた姿に、一時は失望しながらも、駿府を面目一新して復興をしようということだった。家康が駿府の地に天下の名城

を作り、すぐれた遺物を残した理由は一体どこに潜んでいたのだろうか。この一つの理由に家康の人生遍歴がある。天文18年（1549）父広忠の不慮にあい戦災孤児となった竹千代（家康の幼名）は、8才で駿府に人質となってやってきた。そして永禄3年（1560）19才の年まで12年間を過ごした思い出多い地である。

永禄11年（1568）から10ケ年、駿府は武田信玄によって占領され、武田氏の兵站基地となっていた。その後、信玄の病死その他で家康に戦局は有利に転換し、ついに武田勢を駆逐した。家康は天正13年（1585）駿府にはいて、町の復興にとりかかり、同18年豊臣秀吉の小田原征伐に参加するまで、駿府に在住した。

秀吉の没後、自然と天下の政権のバトンは家康にまわってきた。慶長8年（1603）征夷大將軍に任ぜられ、江戸に幕府を開いたが、間もなく將軍職を秀忠に譲ると、家康は再び駿府にもどってきた。駿府は日本国土のほぼ中央にあり、しかも江戸と京都の中間にあって、江戸との二元政治を行なうには格好な土地であった。朝な夕なに霊峰富士を眺めて暮した清潔な幼少年時代を回顧して、家康が晩年にのぞんだ土地はやはり美しい環境と気候温暖な自然にとり囲まれた魅力ある駿府の土地だった。また、悲劇の正妻築山殿をめぐったのも、2人目の正妻朝日姫を迎えたのも駿府だった。家康は不幸にも、2人の正妻に先だたれ、人世の悲哀をしみじみ味わった。駿府の土地は救えれば果てしない家康の郷愁をそそる第二のふるさととして、深く心のなかに喰い入っていた。それは人生の大半を席の温まる所を知らずに過ごしてきた者が、落ち着いて初めておそわれる心境ではなかろうか。ここに、駿府城が家康の居城にふさわしく、織田信長の安土城、豊臣秀吉の大坂城とは全く趣を異にして実現した。

慶長11年（1606）3月20日、家康は江戸から駿府に下り、駿府城築城のため巡見を行なった。この時、一方では京都伏見城の石塁修築が始まっており、万石以下の諸大名が課役を命ぜられているため、その工事の進捗具合からみて、駿府城築城工事の日程を来たる正月まで延期した。また、城地を移すのをとりやめ、現地を拡張することに決したため、従来の今川氏の館敷地跡が尊重された。

駿府城は家康の築城過程からいうと、浜松城・伏見城・江戸城につづく系列のなかにはいり、名古屋城の造成より先であった。また、江戸城築城以来、駿府城・名古屋城とつづく一連の城づくりには、城下町の経営も付随して行なわれた。したがって駿府城の築造は、日本城郭の築造史に新しい1ページを刻んだ“天下の名城”といっても過言でない。現在、信長・秀吉・家康の残した城は、創建当初の天守閣が失われているけれど、遺構と石塁、濠はその一部に原形を残している。なお大坂城・伏見城・名古屋城の天守閣は、復原されて当時の面影をしのぶことができる。それなのに、駿府城は“埋もれた名城”として城郭研究家や、史学者から見放されているのは、あまりにも駿府城の遺構が破壊され、その原形をとどめるものもなく、またこれに準拠する駿府城そのものの資料が乏しいことによるのではあるまいか。

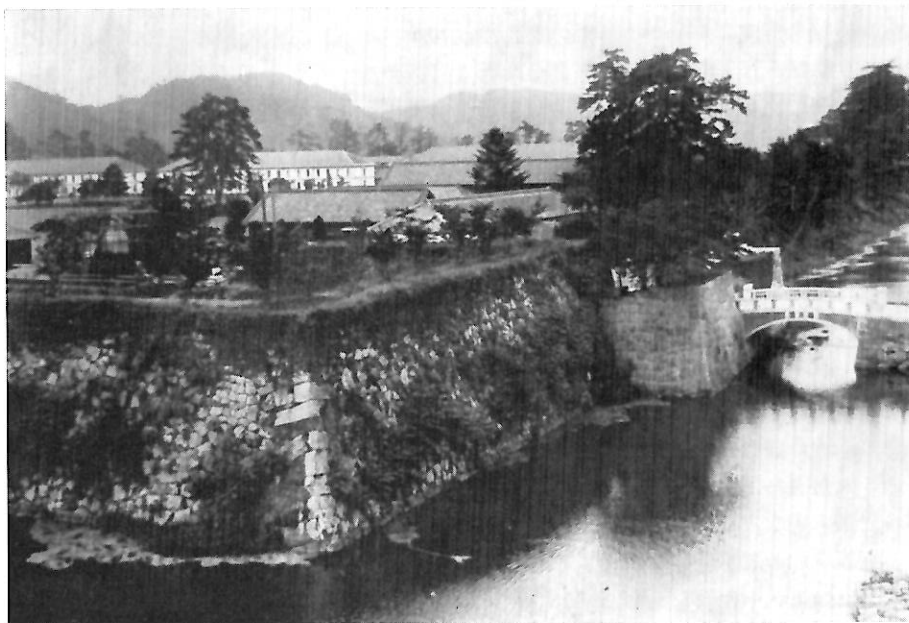
駿府城の工事は、慶長12年（1607）1月25日に幕府より命ぜられた越前・美濃・尾張・三河などの諸大名によって、2月17日より開始された。三枝昌吉・山本正成・滝川忠往・佐久間政実・山城忠久などが奉行となり、黒田長政・鍋島勝茂・筒井定次がこれを助けた。3月25日になると、幕府は畿内5ヶ国と丹波・備中・近江・伊勢・美濃の諸大名に、駿府築城夫役500石につき3人を課し、かつ、伏見城の築城器材を駿府に移送せしめた。また、結城秀康・毛利輝元らの西国大名も、つづいて配課され、駿府城の築城工事は昼夜兼行の突貫工事となり、途中多少の無理をおしても強行され、起工後わずか5ヶ月の7月3日には殿閣建築物が完成して、家康は駿府城に入った。そして8月15日には「二の丸」も半ばその工事を終った。

ところが同年12月22日の午前2時頃、御殿女中の火の不始末から、本丸、天守閣がことごと

く焼失したため、慶長13年正月に再び本丸築造の命が下り、2月14日に天守と櫓門^{やぐら}の作業が始まった。3月1日になると本丸殿舎が落成し、つづいて8月20日に天守閣の上棟式を行って、本丸の西北隅に七重の大天守が金色燦然と輝くいらかをのせて完成した。駿府城は南北726メートル、東西655メートル、面積502平方キロメートルあり、本丸を中心に「二の丸」「三の丸」が濠を境に^{いによう}圍繞している。駿府城にはいるには、まず大手門（四ツ足御門）から入るのを通例とした。櫓形につくられた最初の二つの入口に頑丈な渡櫓門が造られ、堅く城門を閉ざしていた。城門は城郭の虎口にあたるため、その出入口に種々の工夫が加えられている。大手・^{からめて}搦手といわれるのはその一つの現われである。駿府城の大手門をみると、石垣を高く積み上げて城門付近を堅固にし、さらに切込ハギの石塁を利用して城塁の線より内側に櫓形が設けられている。この門は櫓形の石塁の上に^{またが}跨り、渡櫓となった一種の棧門で、扉・柱・梁は鉄板を張って堅固一点張りにつくられた。大手門をすぎると右に城代役屋敷（現在青葉小学校の所）、左に城代向屋敷があり、それにつづいて破損方の小屋、定番御役屋敷がならんでいた。「二ノ丸」の石塁の高さは9.6メートルから9.9メートルあって、石塁の傾斜面は若干そりをもった曲線式である。石積みはノミで石を切って組み合わせた切込ハギと、割ったままの石や自然石を組み合わせた野づら積み法を用いている。したがって駿府城の石垣の面をみると、石垣の隙間が多く、小石を隙間に詰めた、一見乱雑な外観を呈している。

「二ノ丸」の南面する石塁のうえには多門堀をめぐらし、一種の化粧まわしをかねている。多門堀は走り櫓ともいい、城塁のうえに長く連った長屋の矢倉で、無気味な矢狭間^{やはざま}、鉄砲狭間^{てつぽう}が口をのぞかせていた。そして石塁のかどに、^{たつみひつじさる}罌^{やう}坤櫓が三重のユニークな姿を濠の水に映していた。日本の城郭建築中、櫓は最も城郭的性格を発揮したもので、城郭建築に美しさを与えている。建築的にみれば、^{ぬりこみづくり}塗籠造の防火建築であり、実戦の際の展望台で、平時は兵器その他の器材を蓄える倉庫に利用された。

ここで駿府城をいちべつして、注意しなければならないことは、城に表と裏があるということである。表と裏の差は、その施設に手がこんでいるかないかによる。駿府城は本丸・二ノ



駿府城址二ノ丸東御門付近の城濠

丸・三ノ丸とも、屋形城の特徴をよく生かした屈曲のとぼしい石塁で圍繞されているが、それでも表裏の判然とする城である。

城の内容 駿府城内の建造物の配置は『駿府御絵図』からは読みとれない。したがって、城内の絵図を作成する場合、一つの方法として、江戸時代に新任加番が江戸から駿府に赴任した時、城内を案内されるので、その順路から若干の城内の配置がうかがい知れる。最近、静岡市浅間町の山本弘一郎氏宅で、幕臣の書いた控え文書が発見された。この文書は古扇面の表裏に、駿府城内の模様・規模などのこと機密に関することが細かに記録されている。全文を掲載することが出来ないなのでその一部を紹介して参考に供したい。

『山本家古扇面文書』

- 一 御小天守基、東西二拾間、南北拾間、高八間程。
- 二 清水三重御櫓、高五間半程下三重中之重六間四方、上之重五間四方、同折回二階御多門二拾四間、四間に三間、同冠木御門三間流打越六歩、地震後木戸門坤御櫓三重高五間七寸程、下之重、中之重七間四方、上之重五間四方、巽三重御櫓高五間半程、下之重中之重折回拾二間に四間、上之重同拾間半に三間半。
- 三 冠木御門、五間流打越壺間同櫓二拾間に拾間、高二間、東側御多門六拾六間に三間、高二間壺尺、同御門渡御櫓拾三間に四間、高さ二間壺尺、横内御門渡御櫓壺三間に四間、高二間五尺・草深御門渡御櫓拾壺間に三間、高二間五尺、四ツ足御門渡御櫓拾三間に四間、高二間三尺、大手御門渡御櫓拾三間に四間、高三間三尺。

以上一部分を列記しただけでも、今まで構造上未解決だった点に光明を与えてくれる。

駿府城は名古屋城にみられるような小天守をもっていたこと、各種御門には渡御櫓の建築の施行がなされていたこと、また清水・坤・巽の三御櫓は従来二重だと推測されていたのが、三重であって名古屋城の隅櫓とほぼ同型のものだったことなどが判る。

ここでもう一件資料を渉猟する。『駿国雑誌卷十九下』に「(前略) 御定番内藤重三郎忠恕いう。御城石垣を見る。往古の塁築は切石のまま其の広きを上にしてたたむ。故に、その間にありて昇下自由を得、殊に崩れ難し、是を根擢^{ねづり}という。近歳^{きんさい}の塙^{はし}は其の広きを表として石を組む。是を基盤組という。見る処、美麗なりといへども、堅からず、故に崩れ易し、損益心得て可なり」とある。駿府城の石塁は古式石垣の築城法を用いてつくられ、その積み方は見掛けは粗野であるが堅固であった。この石垣の実例を求めると、松本城にそのヒナ型をみることがができる。松本城は家康の無二の友だった石川数正の築城で、本丸、天守土台にも、独特の石塁の積み方をしていて、そのうえに堅牢な大天守・小天守を創作している。駿府城を築城するため、家康はその範を松本城あたりにもとめたのではないかとと思われる。

本丸全体の構築は、居館にふさわしい殿閣と、天守閣・小天守に重点をおいてつくられたと考えられる。本丸大広間の庭に、家康が自から植えた紀州みかんをはじめ“御手植御蘇鉄三株、紅葉山下御手植蘇鉄木数拾五本、枝壺本二株”などがあり、また“御殿御間数十四間、建て坪三百拾八坪”とあって、屋根は瓦ぶきであったが、御座所は晩年の居所にふさわしく入念に手を加えられたようである。なお御殿内部の調度品は伏見城より移送されて、殿閣各所に飾られた。

殿守の落成にともない、二代将軍秀忠、豊臣秀頼をはじめ、諸大名、外国使臣などの献上品は、想像以上の豪華品が集められた。この一部は、久能山東照宮博物館に所蔵されており、当時のことをしのぶことができる。

天守閣は必ずしも大きいとはいえないが、その外容は名古屋城天守の参考となった。いま、駿府城天守閣の資料をあさってみると、天守閣の復原考察の資料になるものとしては『当代

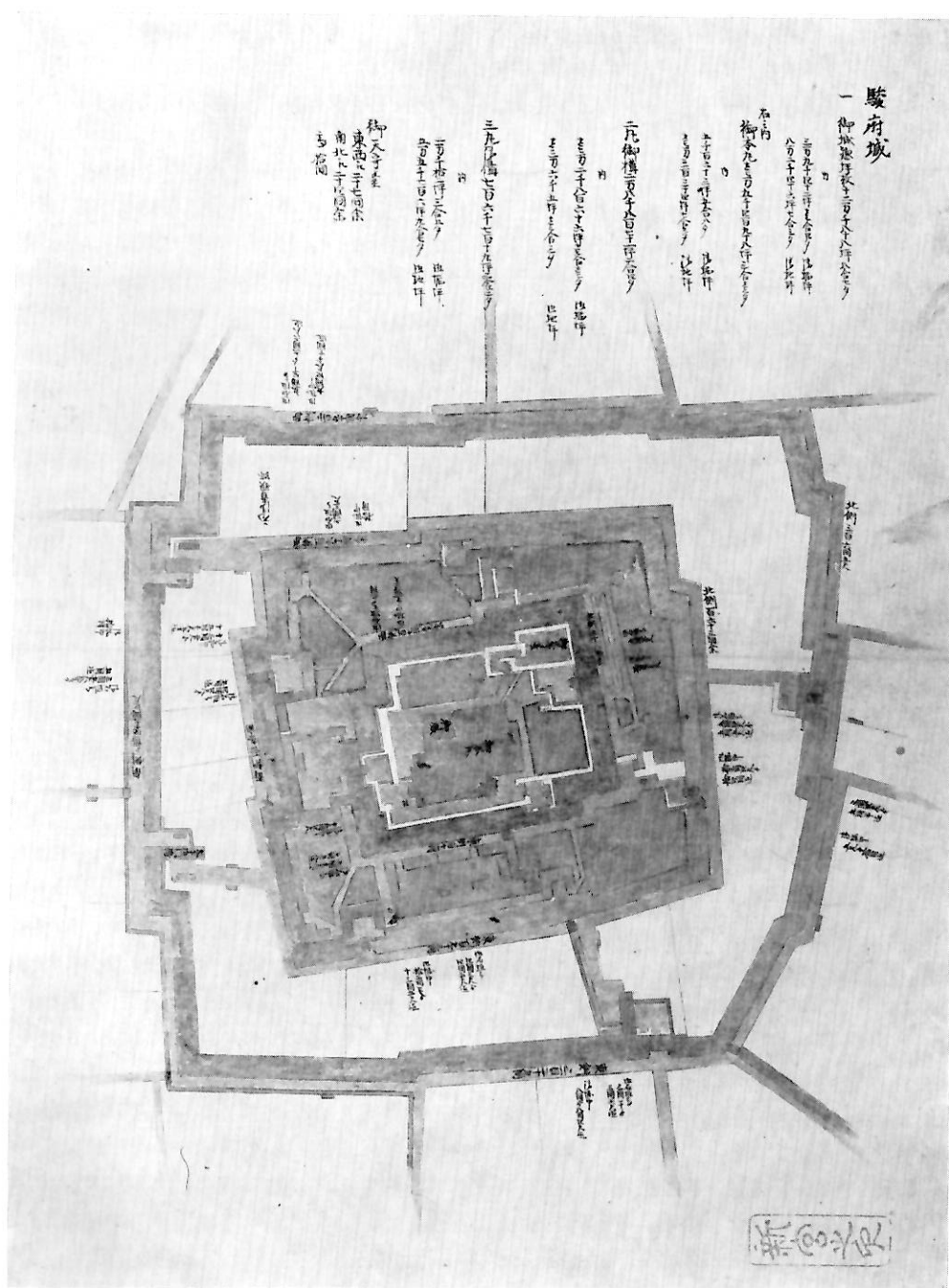
記』『増補慶長日記』『武徳編年集成』などがあげられる。これらの資料には若干のくいちがいがみられるが、大体当時の天守閣の規模が知られる。

『当代記』に例をとると、「初重は十間×十二間、四方落縁あり。二重は十間×十二間、腰屋根、破風あり、五重は六間×八間、腰屋根、唐破風あり、六重は五間×六間、屋根、破風あり、七重は物見え段、屋根銅をもって葺く」とある。駿府城の天守は、七重天守で、これはあくまで、内部構造であって、外観は五層であった。しかも、層重相一致しない古式を留めているところに注意したい。しかも一面外容は、松本城天守のごとく五層の層塔瓦屋根をもちながら、四層内部に一重を加えるような構造上の手法は、名古屋城より、一歩時代がさかのぼる形式手法を示している。

家康は、彼がつくった築城のうち、伏見・駿府・名古屋の各城ごとに、新機軸を出し、独創的な築城をしたことを、私どもは教えられる。私たちは、単に天守台の高さのみだけでも、尊い構造上の知恵を知ることができる。

天守閣論考 戦国乱世の時代に忽然と彗星のごとく現われ、その建築美を誇った天主閣は、1世紀たらずで、その本来の姿と生命を消した。世界中いずれの国にも見ることのできない五層の天守閣は、日本独特の建築として城郭の一角にそびえていた。その独創的な建築方法は、一体誰が何に範を求めて創造したのだろうか。私は安土・桃山文化を生んだ織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の“戦国統一”三人男の時代の所産であるところに、大きな意義を求めている。そしてその素材を、日本古来の仏教建築の五重塔や、当時外国人の渡来によって各地に建てられた、天主堂の先塔と対比して一考してみたい。五重塔は基台のうえに置かれ、心礎のうえに立つ心柱でその中心が支えられる。天主閣も基台のうえに礎石が置かれ、その礎を基盤に柱が建てられ、骨格ができあがった。心柱ともいべき柱を中心として、礎石を案配して配置した。平和の塔であるべき五重塔が、宗教的・芸術的建築から飛躍して、実用的・戦闘的となり、威容をほこる創作的な五重塔の変形から天守閣が出現したのではあるまいか。城郭の発達と時期を同じうして、外国宣教師の渡来で、にわかに日本各地に天主堂一教会の目新しい建築様式が出現した。16世紀に、日本の従来の建築に新風を吹き込んだ天主教の伝来に伴なって建設された教会の建築様式が、当時の戦国武将に与えた影響は大きい。天主教の布教に先立って、宣教師が日本にやってきた。象徴的な教会を建て、異国情緒をかもし出す天主堂の鐘の音は、戦争に飽き疲れ果てた人々の心にしみわたるように鳴り響いた。強力な従来の宗派仏教が、戦争に従事する僧兵をつくり、戦災に苦しむ日本の貧しき人々の空虚な心を救うことを忘れていた。墮落して衆生済度^{しゅうじょうさいど}を忘れた仏教にかわってキリスト教は深く日本人の心の中に浸透していった。天に高くそびえる五重塔以外には、これぞという象徴的な建造物のなかった日本国土の各地に、小ぢんまりした清潔な祈りの場である天主堂が建設されていった。この現実を、三人の戦国統一男や諸国の戦国武将はどう受けとったことだろう。事実上、政治・経済・文化の実権を掌握して、一国一城の主とならんための実力者が、五重塔と天主堂の両者の長短を勘定して創造されたのが天守閣の建造だった、と説く建築史家もいる。また天主堂の「天」をとって、主にかわって守る天守とうがったことをいう史家もいる。今まで山城のお粗末な城砦に甘んじた城郭が、あたかも各地に天主堂が建てられていった速度で、日本各地の群雄割拠の主のまちに造成されていった。

日本の天守閣は、日本の古き伝統である五重塔と、西洋の伝統である教会の塔のいずれも宗教的な考え方から生まれた建築物の長所を採用した。しかも天守閣は、一方では平和の祈りを祈念しながら、一方では実戦的な一国一城の威武を誇る、みせる建造物でなければならなかった。そしてあくまで“日本的なもの”という考えから、入母屋望楼型^{いりもやぼうろうがた}の天守閣が編み出され



駿府城古絵図

た。天主教のもたらした建築法は、よく西洋建築でみられる周壁を壁石で組み、その先端に十字をのせる構築法で、あたかも五重塔の先端に相輪をのせる日本の五重塔の建築手法と相通ずるものがあった。この両者の工法をあくまでも生かしながら思いきった新工法を採用した。たとえば、内部構造はドーム式礼拝堂をさけて、重厚な五重塔の層重様式を踏襲した。この独特な豪壮、華麗で、動的な、しかもその中に清楚な感じをもった城郭が建造されたことは、ただただ驚嘆のほかはない。駿府城に天守閣がそびえたとき、駿府は大御所時代をむかえていた。

駿府の町づくり 天守閣のそびえる城下町は、そこに住む人々に無言の郷土感情をうえつけ、奥ゆかしい心のゆとりをあたえてきた。駿府城が完成すると、家康は慶長13年から14年にかけて、彦坂九兵衛光政、畔柳寿学を奉行として、駿府城下町の経営を命じた。駿府城は標高約15メートルの微高地に設計された平城であるから、自然と城下町も、この地理的条件にささえられ、城の南面と、安倍川との間に区画整理がはじまった。そして、この町造りには町年寄友野宗善の力が大きかったといわれる。駿府96ヶ町の町名は、このとき生まれ、古き静岡市の町名となった。

駿府城の表玄関である大手門、四ツ足御門を基点として一直線をひき、その中心を「札の辻」とした。町名番地のつけ方は、東西に走る街路を、浅間神社に近い方から1丁目とつけた。現在呉服町、両替町にそのなごりをとどめている。南北に走る街道は、城に近い方から1・2・3丁目と名付けられ、本通・新通・七間町1・2・3丁目と、城に遠ざかるにつれて数字を重ねている。1丁目の長さは60間、道路幅は3間と、整然とした町割りで城下町は形成されていった。町家の宅地は城に南面する大手門、四ツ足御門側に扇形にひろがり、江戸の町家に採用された「会所式」がとられた。したがって、町家の多い中心部は基盤割りで、城に遠ざかるにつれて短冊型に変形する。そして、そのなかは迷路、袋小路、路地がつくられ、城下町の特色を発揮し、名古屋の城下町形成の手本となった。これに反して、城の東・北・西の三面は、後に勤番組が居住する武家屋敷が取り囲んだ。鷹匠町界限は一加番、西草深町界限は二加番、水落町界限は三加番といい小身ものの武家屋敷で囲繞された。駿府城周辺に占めた武家屋敷の広さと町家の広さは、三対一の割り合いで、その占める面積は雲泥の差があった。『駿府明細記』・『駿州御番衆覚書』によれば、いまの静岡市役所付近に駿府町奉行所が9ヶ所（395坪）鷹匠町稲荷社界限に一加番屋敷が3ヶ所（237坪）、NHK静岡放送局付近に二加番屋敷が2ヶ所（252坪）、三加番稲荷社周辺に三加番屋敷が2ヶ所（347坪）をはじめ、紺屋町のお陣屋（代官屋敷）・城内在番頭・定番の役宅から、軽輩の与力・同心・徒士・足軽・小者まで合わせると、にぎやかな町人の占居地はほんのわずかの土地しか与えられなかったとみるべきだろう。町人の宅地は、1町4方の区画のなかで間口2間×奥行き5間、もしくは間口3間×奥行き6間のせまいものであった。

駿府の豪商松本新左衛門が住んでいた両替町の町家でさえ惣小間数百十、折回間口58間半、町役11間分にすぎなかった。一方、城下町の建設とともに始まった駿府の経営は、商・工人を全国から招いたため、静まりかえった武家屋敷に比べて、町方は殷盛をきわめ、駿府は貨幣経済の中心ともなった。諸役の免除や、自由営業が許されるなど、商家は経済的恩恵を受けたうえに、駿府のまちに31ヶ所の諸役御免の町が生まれた。それらは鍛冶・研屋・御器屋・上下樋屋・院内・上下・大工・藤右衛門・浄塵・西寺町・新通六・伝馬・新通川越・提川越・材木・安西三・四・八幡小路・鋳物師・上下横田・横内・猿屋・台所の各町で、現在では、すでにいくつかの町が姿を消したが、これら町内に住んだ町人は、駿府の商工業の発展のために一役買ったのである。駿府の町は天下の府として、当時江戸15万、駿府10万といわれた。人口動態

は『駿府政事録』に詳細に記録されている。それもこれも、駿府が大御所家康の居城にほかならなかったからである。家康は、たとえ駿府に隠居していたとはいえ、江戸の2代將軍秀忠を後見しつつ、天下の大事を決し、駿府の黄金時代を作出したのである。そして、元和2年(1616)家康が波乱万丈の一生を終えると、政治の中心はあわただしく江戸に移ってしまった。駿府のまちのさびれかたもひどく、元禄5年(1692)2日の『駿府町数並家数人数覚書帳』によると武家屋敷の人数を除いた町人の人口は17,058人となっている。

駿府から静岡へ 慶長14年(1609)徳川頼宣が水戸から、駿河・遠江に封ぜられ、父家康とともに駿府に在住した。そして、家康没後の元和5年7月、紀伊和歌山に転じたので、駿府は一時番城となった。寛永2年(1625)正月、徳川忠長が、駿府50万石の知行を与えられて甲府から移ってきた。徳川忠長は徳川二代將軍秀忠の第三子として、慶長11年12月に生まれ、幼少のころから英敏で、秀忠夫妻にはことのほか、寵愛されたといわれる。寛永2年、忠長が甲斐をあわせて、駿河・遠江を領有し、過分の処遇をうけたのが運のつきで、自分の身を律することも次第に驕慢となり、その果てに乱行の噂がとぶようになった。江戸の將軍秀忠も、ついに忠長の行状の不詳をかくすすべもなく、ついに寛永9年(1632)高崎に幽閉の処置をとらざるを得なかった。そして間もなく28歳の若き命をたっている。必然的に忠長の封地は没収され、駿府城には松平大膳亮忠重、秋田河内守俊孝、新庄越前守直好が在番した。長崎半左衛門元通、佐藤勘右衛門継成は町奉行に、使番川口茂右衛門宗重は横目役に、大番頭松平豊前守勝政は組士となって、勤番を命ぜられた。駿府城は、再び一国一城の主を迎えるチャンスを失ってしまったし、それにかわる在番の勤務者は、今様のサラリーマンとなんらかわらぬお役目大事の公務員となってしまった。

駿府は松平豊前守が初代の城代となって、直轄領を治め、駿府町奉行とともに、駿府の住民に最も身近な結び付きをした。2人の町奉行は、1人は大手御門に、1人は横内御門前に役宅が与えられ、明治維新まで駿府の治政をあずかった。この間、寛永12年(1635)11月29日、駿府城の殿舎・天守など悉く焼失してしまっただけというものは、駿府城内は荒れるにまかせ、城代、および、勤番の住宅を除いては、城郭の整備は言うに及ばず放置され、駿府は事務官僚である江戸から赴任する幕府の役人の治める所となってしまった。250年の徳川治世も終わり、明治の黎明期を迎えると、新政府のもとに、日本の地図は大きく塗りかえられた。新政府は中央集権を強化する必要上、版籍奉還を決意し、まず薩・長・土・肥の四藩が連署をもってこの由を願い出た。この結果、駿府は静岡藩となり、駿府城主徳川亀之助は府中の城主として赴任した。明治2年、駿府が静岡と名付けられ、文明開化の第1歩を踏み出したのもこの時である。城内外に居住した藩臣はその職を失い、四散のやむなきにいたった。明治4年7月、近代国家の形成は改革から始まった。その第1は廃藩置県である。4月14日に静岡藩は廃止されて、静岡県が新設され、駿府城は廃城となった。その当時、駿府城の面影を残していた多門堀なども、無残に取りこわしの運命にあった。思えば、駿府城は家康の没後、住民と城主とのつながりもなく、ただ間接的に江戸に居る將軍と、淡いつながりが保たれただけであった。他の城下町では、城と住民、城主と町民の間が堅く結ばれたのに反し、駿府の住民の心には、なにか空虚なものが残ってしまった。明治22年4月1日、静岡市制が施行され、静岡市政の最初の仕事は、駿府城の払い下げに関する公債消化であった。ところが明治27年から28年の日清戦争後、静岡市は駿府城址全部の敷地4万余坪を陸軍に無償で献納して、歩兵部隊を豊橋から誘致した。由緒ある本丸の濠、天守台をはじめ、その他の遺構は、再度取りこわしの運命にあった。本丸の濠は埋められ、明治30年から、昭和20年まで、軍隊の駐屯地となった。そして終戦後、3転して駿府城は下に払い下げられたが、今やお濠をめぐる石垣と、わずかに残る老松に

昔時の繁栄をしのぶにすぎない。現在、駿府城整備計画に基づいて、駿府城址は近代的な一大公園に生まれ変わりつつある。はたしてそれでよいのであろうか。ただ“城址”を残せせ！とさけんでも、ただ“天主閣を再建せよ”とさけんでも、そこに正確な史料がなければならぬ。私たちが真実性のある史料によって、正しく伝えられるすぐれた文化財に接することは、それが古いからでも、めずらしいからでもない、それは先人があせみずながして築きあげた、生活の結晶の中に、現在の自分自身を見い出すことである。

私たちが今見ることのできる駿府城址は、大河の流れにうかぶゴミのようなものである。そのゴミの下には歴史という大きな流れが流れている。ゴミだけを取りあげて歴史を言うことはできない。その底にあるものはほかならぬ、目にみえない私たちの生活なのである。

博物館のあゆみ

館内業務

1 特別展について

○昭和45年1月1日より4月30日まで、「徳川将軍と名刀展」と題し、徳川歴代将軍の所持していた名刀を中心に、各代の遺品類をもあわせて展示。

○5月1日より9月3日までは、「徳川将軍と具足展」と題し、徳川歴代将軍の所持していた具足を中心に展示。

○昭和46年1月1日より3月31日までは、「漆と染織を中心とする徳川将軍の秘宝展」と題し、徳川歴代将軍の所用した染織漆器工芸の優品を中心とした展示。

2 平常展について 昭和45年9月3日より12月31日まで平常展をおこなう。

3 友の会について

4月 「駿府と家康展」を個々に見学。

5月 当館主催の講演会に参加。演題「日本の美を探る」、講師 山種美術館 倉田公裕氏。

6月 賤機焼の制作。

7月 賤機焼の作品展と駿豆考古学会の講演に参加、演題「旧石器文化概論」講師、当館学芸員 森威史氏。

8月 第5回文化財入門講座に参加、講題「静岡県の古墳文化」「静岡県の初期仏教文化」講師、静岡考古館学芸員 望月董弘氏。

9月 第4回博物館見学（横浜、三溪園、海洋科学博物館）

10月 「生きている日本刀展」を個々に見学（田中屋）

11月 東京国立博物館「東洋陶磁展」見学

12月 “軸物の取扱い方”の実習
1月 県文化財保存協会との共催で、「今川四代の史蹟めぐり」を実施。講師、安本博氏

2月 休み



三溪園見学（9月）

- 3 月 県文化財保存協会との共催で、「京都・奈良の史蹟めぐり」を実施。
- 4 重要文化財革柄蠟鞘刀附蒔絵箱の修理が完成し、4月16日当館に送り届けられた。
- 5 刀剣類定期手入れが5月28日池田猪太郎氏によりおこなわれた。

館外業務

1 「駿府と家康展」について

3月29日より4月6日まで、静岡県文化財保存協会、静岡放送・静岡新聞、当館の共催で、田中屋にて開催された。主な出陳物は金溜塗具足、伊予札黒糸威胴丸具足、コンパス、他。

2 資料の出陳について

- 信長・秀吉・清正展 京都伏見城にて、大阪新聞社主催にて開催（3月7日～5月31日）家康手形、「虎」文字、家康遺訓、信長・秀吉・清正の手形を出陳。
- 大岡越前展 浅草松屋にて開催（8月14日～19日）本小札緋紫威鎧、軸物を出陳。
- 日本名刀展 大丸東京店にて開催（8月28日～9月2日）国宝 太刀 銘 真恒（附）糸巻太刀拵を出陳。
- 徳富蘇峰展 東京銀座松坂屋（9月15日～20日）、名古屋松坂屋（9月22日～27日）にて開催。家康画像、手形、硯箱、鉛筆、他を出陳。
- 近世日本の美術貿易展、サントリー美術館にて開催（9月26日～11月8日）薬簞笥、コンパスを出陳。
- 徳富蘇峰展 大阪松坂屋にて開催（10月6日～11日）家康画像、手形、硯箱、他を出陳。
- 種子島からライフルまで鉄砲展 川崎市さいか屋にて開催（11月5日～18日）家康画像を出陳。
- 物産展 千葉のそごうにて開催（11月6日～18日）家康画像、手形、刀 伝光世作（写）を出陳。
- 織田信長史料並びに史跡写真展 静岡県立中央図書館にて開催（11月26日～12月15日）信長書状、手形を出陳。
- 剣聖柳生展 東京松屋（1月4日～13日）阿倍野近鉄百貨店（1月22日～27日）にて開催家康画像、伊予札黒糸威胴丸、他を出陳。

3 「生きている日本刀展」について

古代から現代にいたるまでの名刀70点と刀装10点を展示。（うち、国宝5点、重文15点）

9月23日～10月18日	三島市佐野美術館	} にて開催
10月21日～10月26日	静岡市田中屋	
1月2日～1月11日	いわき市大黒屋	

主な出品物は、国宝 太刀 銘 真恒、重文 短刀 無銘 貞宗、重文 脇指 無銘 行光、薙刀 直江志津、糸巻太刀拵他。

4 「徳川十五代甲冑と刀剣展」について

徳川家歴代将軍にかかわりある甲冑、刀剣、書画を中心に80余点を展示。

1月4日～13日	横浜松屋	} にて開催
2月20日～28日	いわき市大黒屋	

主な出品物は、東照大権現画像、刀 伝光世作（写）、脇指 無銘 行光他

5 東海地区博物館連絡協議会について（5月19、20日）

神奈川県立博物館においておこなわれ、当館より白井館長、森主任、宮原書記が出席した。

6 静岡県文化財保存協会総会について（6月6日）

県文化センターにて45年度総会が開かれ、白井館長、森主任が出席。席上森主任が、44年

度事業協力者として表彰された。

- 7 静岡県博物館協会総会について（6月26日）
佐野美術館にて開かれ、白井館長、松浦副館長、森主任、小幡書記が出席。
- 8 全国学芸職員研究会について
7月2、3の両日、静岡市第一生命ビルにて行なわれ、森主任、小林学芸員が出席。
- 9 全国博物館大会について（10月5日～9日）
第18回全国博物館大会が長野県にて行なわれ、松浦副館長、小林学芸員が出席。
- 10 職員旅行について
6月9日から2班にわかれ、姫路城、播磨国総社、湊川神社、生田神社、万国博等を視察。

庶務報告

1 45年度入館者状況

月	区分	大 人	小 人	団 体	計
4 月		9,392	1,011	663	11,066
5 月		7,041	678	2,116	9,835
6 月		4,116	220	406	4,742
7 月		4,232	330	503	5,065
8 月		7,227	1,738	224	9,189
9 月		4,933	314	406	5,653
10 月		5,504	291	2,125	7,920
11 月		5,612	572	849	7,033
12 月		1,289	126	30	1,445
1 月		4,529	711	0	5,240
2 月		3,298	352	0	3,650
3 月		5,902	1,304	347	7,553
計		63,075	7,647	7,669	78,391

2 その他

- 昭和45年4月1日付にて学芸員1名（小林明、国学院大学卒）が入り、博物館の強化をはかっている。
- 宮原書記が6月30日付をもち退職。
- 7月21日、博物館専用電話開通 番号 0542—85—2437
- 平岡書記が8月21日付をもち退職。
- 11月25日より46年3月24日までロープウェイ拡張工事の為運休。

編 集 後 記

第4号をおとどけします。年度末の発行で皆さまにおとどけするのが大変おこなれてしまいました。次号は特別展「徳川将軍の書画展」の特集を予定してます

久能山東照宮博物館報

第4号

昭和46年3月31日 発行
編集発行 久能山東照宮博物館
〒420 静岡市根古屋 390
TEL 0542 (85) 2437